注(4)　諱は元綱。天正7年〔1579〕16歳の時政宗に召出され小姓として側近に仕えた。英才に富み能力抜群、顕著な功績を積み累進出入司に挙げられた。伊具郡丸森に1千8百石の知行を賜わり、着座の家格に列せられた。正保3年〔1646〕11月23日歿、享年83、仙台越路瑞鳳寺に葬る。

注(5)　建築工事をいう。作事に対し土木工事を普請〔ふしん〕といった。

資料　貞山公治家記録附録之1（「伊達治家記録」4の内）

43.　「こどのでえどうり」とは

問　「こどのでえどうり」とは、どこのことですか。

答　「こどのでえどうり」とは、仙台の勾当台通(1)のことで、町名の表記に当てた漢字の音や訓にこだわらぬ呼び方の一つです。このような慣例は、他の町名についても少くありません。「枕頭漫語」（非想庵(2)。「わしが国さ」第12号の内）に、次のような記事があります。『〔前略〕今の養賢堂から県庁の辺までが昔の勾当台通となってゐるけれども、古い人は皆なコドノデエドオリと呼ぶ(3)、コドは勾当に相違ないとしても勾当と台との間のノの字を入れて呼ぶのが正しいと思ふ　…昔の仙台人が勾当台通りをコドノデエドウリと呼んだ……南町をミナンマチ、新伝馬町をシンテンマチ、国分町をコップンマチ、遣水丁(4)をヤリンミテフ、土樋(5)をツットヒ、米ケ袋(6)をコメヤフクロなど呼んだ。このうち現今の称呼、米ケ袋(7)といふのは誤りで、元は米屋袋(8)と文字にも書いたのだからコメヤフクロ(9)の呼び方は正確なのである。』

このほかにも、「新坂通(10)」を「にうざかどうり」、「北目町(11)」を「きたんまち」と呼んだなどの例があります。

注(1)　もと養賢堂のあったあたり、現在の県庁構内は、政宗時代花村勾当〔花山村出身であるので花山とも伝えられる。勾当は盲人の官名で検校の下で座頭の上に位したもの。〕の屋敷のあったところで、台地〔地学上の上町段丘〕をなしていたところから、勾当台の地名が出た。政宗が造成直後の城下町を見廻ると、この勾当がこのあたりの路上に土下座していた。名を尋ねると、彼は即座に「名に一字ちがひありとてことごとし君は政宗われは政一」と狂歌で答えた。政宗はその頓智を賞し、此処に屋敷を与え勾当を厚く遇することになった。花村勾当の屋敷は、明暦2年〔1656〕頃泉田出雲の屋敷となったが、更に宝暦10年〔1760〕養賢堂がここに移ってきて、文化14年〔1817〕大講堂が建てられた。戦災前まで、この講堂前の池の端に桧の大木があり、その根元に花村勾当夫妻

の墓碑と伝えられる石碑があった。「おこり」や「百日咳」に特効があるという迷信があって、ひどく削り取られた状態であったが、今は跡形もない。戦後、昭和23年講堂跡地に県立図書館が建てられた。現在の県庁文書庫が、榴岡に移って行った県立図書館の書庫の転用である。この勾当台の西側を南北に通る通を勾当台通といった。定禅寺通から北上して北四番丁に直交する通りである。現在の勾当台公園もこの名にちなむものである。養賢堂構内の西北隅に火見櫓があった。元文3年〔1738〕本櫓丁から移されたもので、明治初年まであり、この周辺を俗に櫓下と呼んだ。P.267注(1)・注(2)参照。

注(2) 藤原相之助の号。

注(3) P.16「8.養賢堂版について」参照。

注(4) P.414 注(7)参照。

注(5) 大町五丁目に続き、その東の東二番丁から東五番丁との交点までの町である。もと日形町と呼ばれた町人町。後に、いわゆる4伝馬町の一つとなった。延宝6－8年〔1678－80〕の絵図から、町名が新伝馬町と改まっている。4傳馬町についてはP.185 注(16)参照。明治20年鉄道開通により、仙台駅への至急距離を占めることになり、地の利に恵まれた商店街として繁栄し現在に至っている。昭和59年12月4日、三滝不動尊前の舗道中央部に、ブロンズの「旧町名板」が埋め込まれた。地元青年向上会が創立45周年記念事業として設置したものである。12月5日付の朝日新聞県版の報道記事に『…「日形町」は青葉城築城とともに消え、新しく伝馬の中心地にちなんだ「新伝馬町」として戦後しばらくまで愛称されてきた。』とあるのには誤りがある。
×××××××××××

注(6) P.414 注(7)参照。

注(7) 東六番丁・宮町のキリスト教会の南側から小田原車通に通ずる横丁。この遣水丁の西端向い、東六番丁西側の屋敷内に長方形の湧水池があった。〔明治26年仙台市実測全図にも見られる。〕この池水を東側の横丁沿いに導き入れた遣水の流れがあったので、この町名が生れたという。今は、その池も遣水も形跡がなくなってしまった。なお、この横丁は道幅が狭く、その上両側から竹や樹木が覆いかぶさっていたので、槍を持った侍が通れないし、また東六番丁、宮町を通る槍を持った行列も見えないので、「槍見ず丁」と呼ぶようになったという信じ難い俗説もある。

注(8) 仙台城下創設工事の進行過程で、東方清水小路の線で、河岸段丘の地層を伏流する豊富な水脈を切断してしまったため、止度なく噴出する湧水に阻まれ、城下作りはこの線で中止せざるを得ない状態となった。この湧水処理のため、排水路を掘削して南へ広瀬川に流す一方、更に荒町と土樋境の段差沿いに東に向けて掘った所謂孫兵衛堀で宮城野原へと流した。いずれも応急素掘りの護岸もできない水路であったので、土樋の地名が生じたものであろう。「樋」には古くは「堰」即ち水路の意味もある。P.30「6.清水小路」

（「15. 七坂八小路」の内）参照。

なお、古地誌「仙台鹿の子」は『土樋はむかし土の樋をかけ水を流したる事ある故土樋といふ。』また「仙台萩」は『土樋は昔土の樋を懸け水を流したることあって土樋といふ。孫兵衛堀へ落せしなり。』と記している。如何なる水を、如何なる必要があって流さなければならなかったのか。また土製の樋が果して実用に堪えたのかどうか、共に信じ難い記述である。「仙台鹿の子」・「仙台萩」についてはP.194 注(5)参照。

注(9) 片平丁の西、広瀬川の廻流するゆるやかな傾斜地一帯の汎称である。昔は仙台が原とも呼ばれ鶉その他の小鳥類の多く繁殖棲息するところであった。「大日本地名辞書」第7巻（吉田東伍）には『米ケ袋一に米屋袋ともいふ』とある。米ケ袋縦三丁（鍛冶屋前丁・中の坂通（鷹屋通）・鹿子清水通）と横六丁（上丁（鷹匠丁）・中丁・広丁・下丁・川前丁・十二軒丁）とが割出されていた。古くは広瀬川の徒渉地点もあった。片平丁との境の段差線には清冽な清水が湧くので有名である。「鹿の子清水」については、P. 166 注(3)参照。

上丁から土樋西部にかけて、鷹匠や餌差〔鷹の餌となる小鳥などを捕える役〕の集団が居住していた。今は、宮城県工業高校があるほか、閑静な住宅街となっている。

注(10) 元禄8年〔1695〕北二番丁西端〔現在の知事公舎前〕から澱町、角五郎丁へ通ずるため切り開いた坂道を新坂という。この新坂に通ずる道が新坂通で、新坂の東端と北山町とをつなぐ通りである。今は北四番丁から北六番丁の区間が、東北大学医学部の敷地に入ってしまって南北に両断されている。

注(11) P. 185 注(16)参照。

資料 わしが国さ第12号（仙台協賛会）

仙台地名考（菊地勝之勝）

44. 西公園のこけし塔

問 仙台の西公園のこけし塔には、銘板に「昭和35年12月建設」と刻んであるだけです。詳しいことが知りたくて観光案内書などを調べたが、何も書かれたものがありません。これについての適当な資料がないでしょうか。

答 こけし塔に関する資料には、「七十年史」（仙台商工会議所）と「商工仙台」№30（1974年9月、仙台商工会議所）とがあります。いずれも一般には出廻らず、今では残存が少なくなりま